

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520681

研究課題名（和文） 東アジアの都市における伝統的生活空間構造の形成と伝播についての歴史地理学的研究

研究課題名（英文） Historico-Geographical Study for Fromation and Diffusion of the Traditional Structure of Living Space in East Asian Cities

研究代表者

秋山 元秀（AKIYAMA MOTOHIDE）

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：00027559

研究成果の概要（和文）：

典型的には中国の旧都城に見られるような伝統的空間構造は、歴史上、漢民族が居住してきた本土地区だけではなく、周辺の異民族地区でも、定住のための都城が営まれる場合には類似した形態をとる。ただしチベットのように、漢民族がほとんど居住していなかったり、モンゴルのような遊牧民族の居住区では、定住指向の都市でも異なった空間構造をとる。朝鮮半島や沖縄では、両者の混在が見られる。

研究成果の概要（英文）：

The typical traditional spatial structure that has been made by Chinese was found not only in the mainland area of China but also in the marginal area where minority people are settling. But some area, for example Tibet or Outer Mongol where in past time only few Chinese settled, they have different spatial urban structure from Chinese. In Korea and Okinawa(Ryukyu) we can find mixed style.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：東アジア、都市、生活空間、空間構造、文化伝播

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの本課題の研究としては、筆者は以下のように考えていた。

中国の伝統的空間構造としては、都市は基本的に城壁で囲まれ、居住者の生活空間も、外部に対しては閉鎖的であるが、内部においては、中庭(院子)を核にした求心的な構造を

持っている。とくに中国の都市においては、公的施設や支配者(およびその関係者)の占有する空間が、きわめて大きな位置を占め、それも都市全体の閉鎖性を強める結果となっている。このような伝統的な構造が、近・現代においても、本質的なところで踏襲されている。現代中国で、「単位社会」といわれる

閉鎖的な居住空間も、新中国になってはじめて出現したものではなく、その背景には伝統的な空間構造に対する意識があると思われる。

日本は、これとは対照的に、城下町で典型的に見られるように、都市は城壁をもたず、町家では生活空間も開放的で、外部と内部の空間が断絶されず、機能的にも連続している。内部の路地空間(京都で通り庭・坪庭などと呼ばれるものは、床上空間を機能的に補完するもので、家屋の中で混然と混じりあっており、中国の院子空間とはまったく異なる。都市には、町家以外にも武家屋敷や下級武士の居住地、寺町など、さまざまな機能をもった空間があるが、それらも外部に対して塀で区切られていても、その区切られ方や内部の構造は、中国のものとは異なり、外部空間との連続性を重視するものである。このような空間に対する意識は、現代日本においても存続していると考えられる。

韓国においては、都市に残る伝統的な家屋の空間構造は、中国的というよりも日本のそれに近い開放性を備えている。しかし、韓国の場合、家屋の内部が男女や世代によって厳密に区別されたり、庭のような露地空間と床上空間が日本のように混ざり合うのではなく、整然と区別されたりするなど、日本とも異なる構造をもっていると思われる。また韓国の都市においては、日本の町家に当たる商業的都市空間の展開が非常に限定的であるのも大きな特徴である。ただし、この点については、まだ十分に検討が進んでいない。

一方、筆者の知りえた東南アジアの都市においては、ハノイの旧市街地やタイのバンコクのチャイナタウンのように、中国の伝統的な都市を髣髴とさせるところもあれば、タイのチェンマイのように、日本の都市の住宅街に類似したような空間構造をもつところもある。またカンボジアのプノンペンのように、植民地時代の計画的構造をそのまま残存させている都市もある。東南アジアの都市は、それぞれの地域の伝統や近代以降の歴史を反映して極めて多様であるが、その多様性の中に、いくつかの基本的なパターンを発見することができると考えている。

本研究は、この成果を踏まえ、東アジアに存在する多様な生活空間の構造が、どのようにして成立したのか、その源流はどこにあるのか、それらは東アジアの諸文化・諸文明とどのように関連しているのか、などについて研究を行おうとするものである。

## 2. 研究の目的

東アジア（ここでいう東アジアは、いわゆる東北アジア—日本・中国・コリア・モンゴル—と東南アジアを含んだ範囲をいう）全体を視野に入れていること。これまでは、中国

を中心に研究を行ない、主として中国・韓国を調査の対象としてきたが、今回は、これまでの成果を踏まえて、東アジア全域における生活空間の構造を研究対象として、多様性のなかから、より統合的に理解するための理論的背景を探ろうとしている。

都市の構造を、生活空間という最も基礎的な空間から、都市全体の空間、また都市と周辺郊外まで含め、空間構造を重層的に考察しようとし都市の空間については、都市全体の都市プランや機能別の地域構造を取り扱う研究や、一方ではマイクロな住居住宅の研究は多いが、それらを重層的な構造としてとらえることができるのは、本研究の立脚する地理学の得意とするところである。

特定の時代だけを対象とするのではなく、伝統的な空間構造が生まれた経緯とその伝播を明らかにし、現代にどのようにつながるかまで研究対象とすること。本研究は、ある特性を持つ空間構造の起源を明らかにするための歴史的研究にとどまらず、それが地理的にどのように展開し、他の文化とどのように関連しながら現代にいたっているかを考察する。

## 3. 研究の方法

都市空間構造に関する資料として以下のようものがあげられる。これらの資料を、既に公開されている文献や図録などから収集するとともに、博物館などに収蔵されているものを調査し、これを生活空間という観点から分析する。

都市図（絵図・地図） 中国の『清明上河図』その他各種都市図、とくに都市の街巷までを描いた詳細な都市図。

考古資料 古代の墳墓から発見される明器としての住宅模型。

文献資料・考古資料の予備的調査を踏まえた上で、都市空間についての現地調査を行う。その地域で典型的な伝統的空間構造を持つと考えられる都市である。歴史的地図と現代の地図とを比較しながらフィールドワークを行い、現代の都市構造と前近代の伝統的な都市構造との比較検討を行い、歴史的地図に基づいて、現代の都市構造を決定している要素を析出する。北京や上海などの大都市では、このような検討はかなり行われているが、それ以外の歴史的都市、開封や平遥においては、まだすすんでいないので、調査を行うのに適当である。

また河南省・山西省ともに、考古学的研究の豊富などであり、両省の博物館において都市空間構造に関する考古資料の収集も行う。

次に中国の周辺文明圏としての韓国、ベトナム、台湾、沖縄などの都市空間構造のありかたを整理検討する。とくにそれぞれの周辺

文明圏でも、他の文明圏との接点としての機能を果たしてきたような地域の実態に注意して調査を実施したい。例えば韓国の済州島、琉球列島、台湾などがその対象である。

中国文化は、前近代においては強い影響力を持って周辺諸国へ伝播した。そしてその伝播の経路において痕跡を残している可能性がある。その候補として、韓国南端の済州島、朝鮮と日本の外交交渉の担当者であった対馬、また中国と日本の両者と対等に交渉をもっていた琉球(沖縄)、さらに中国の辺境としての台湾や海南島などが、調査の候補である。

#### 4. 研究成果

当初に予想した中華文明圏の中でも周辺圏域に相当する地域において、中国の伝統的生活様式に基づく空間構造だけではなく、その地域文化と歴史に応じた独自の空間構造が展開していることが明らかになった。

韓国の済州島では、韓国本土にある伝統的な構造をもつ都市だけではなく、農村には独特の空間構造をもつ小都市が見られる。

沖縄には、古琉球時代からグスクという、独特の要塞都市が発達し、これが琉球王朝の都城まで続くが、これは日本にも中国にもない構造をもち、両者の影響を受けたと思われるがその関係はまだ明らかではない。

台湾においては、日本統治時代以前の西海岸の都市は基本的には漢民族的伝統に基づくものであるが、日本統治時代に日本の近代都市計画の影響を受けて伝統中国の都市とは異なる構造が生まれた。

辺境都市の具体的な様相について中国寧夏回族自治区の銀川と甘肅省酒泉における調査で得られた結果を述べれば以下の通りである。

《銀川》寧夏という地域が一貫して中原の西北の辺境、モンゴル高原との接点にあって、しばしば特別な軍政が敷かれたりしながら、次第に農業開発が進められていったことがわかる。古く漢代や唐代に遡っても、この地域の動向が関中・中原の安否を左右していた。

それを逆にみれば、関中・中原の漢民族政権が安定しておれば、この地域も北辺の一地域としてまとまっているのだが、一旦漢民族政権が脆弱になると、この地域も不安定になり、北方異民族の跳梁する舞台と化してしまう。その最も突出した事例が西夏王朝の成立であり、この時には漢民族側としては、宋朝が北方の遼や金の征服王朝に悩まされて辺境に目を配るどころではなく、北方にも強力なモンゴルが誕生する前の間隙を突いて、寧夏から甘肅にかけての回廊地帯が、タングート系民族の王朝の領域として独立してしまったのであった。

辺境とは常にそれを挟む二つの強大な勢力によって翻弄されがちなのだが、ときに辺

境自身が独自の光輝を放つ時代が訪れることがある。寧夏地方にとって西夏とはまさにそのような輝かしい時代であったといえようか。西夏文字に示されるような西夏文化の独自性への異常ともみえるこだわりというものは、辺境に成立した王朝のもつ宿命かもしれない。しかし辺境がそのような自立したままでおかれることは難しい。モンゴルの侵攻は西夏の繁栄を消し去り、その民族文化は限られた文物として遺されただけであったが、その地域は寧夏という名で呼ばれるようになった。そして中央アジアと東アジアを一体として支配したモンゴル時代は、中国に多くのイスラム教徒が移住定着し、漢民族との混住のなかで回族・回民として集団を形成していく契機となる。そのなかは、関中と西域を結ぶシルクロードを軸とした回廊としての甘肅と、関中からモンゴルに至る後背の地としての寧夏とに大分されるが、のちに「寧夏」と「回族」が結びついた一つのまとまりをもった地域が生みだされる素地がここにある。

この寧夏を中心である銀川が、都市として成立した経過をたどると、その古い核となった都市は唐代やそれ以前に遡るとしても、一国の宮都に準ずる規模をととのえる発端となったのは、李徳明による建都であり、次いで西夏第一代の皇帝となるその子、李元昊による興慶府としての整備である。西夏は制度文物など、漢文化を取り入れるのに熱心であったから、都城の整備も中原の漢民族のそれに倣ったことが予想されるが、詳細を示す資料はない。しかし明清から現在に至る銀川の市街地の構造を見ると、正長方形の城郭の中に、正南北方向に整然と街路が敷設され、長安や開封の都市構造との類似を思わせる。

その後、モンゴルの侵攻により完全に破壊され、一旦街区は空城になったといわれる。中統年間には修復が加えられたが、都市人口も大幅に減り、都市の規模を維持することが難しく、その西半分は放棄され東半分だけに城壁が設けられ、市街地が設定された。

明代になると、洪武年間の当初、都市住民を陝西に移住させたため再び空城となったが、すぐに各地の移民をもって充実させたという。また正統年間には都市内の人口が増えたため、先に放棄した西半分を再度修築し、これを新城と称した。今度の城牆は磚で葺いたらしい。

さらに万暦になって南北の城門の外に城廂を設けている。『寧夏新志』に記載されている寧夏城図によると、東南の城門(南薰門)の外に城廂が描かれている。この図は嘉靖年間のもので考えられるから、万暦にはこれにさらに北の城廂が加えられたのであろうか。この図を見てわかるほかに特徴的なこととしては、整然とした区画された都市構造と、

その中に配置されているおびただしい官寺や廟堂である。一部は城郭に接した形で外部にも設けられている。これらを現在確認することはほとんどできないが、玉皇閣など、現在も姿を残しているものもある。

自然集落として発達した都市は、街路も屈曲したり迷路状になったりして、整然と縦横に走るようなことはない。したがって、現在の銀川は西夏から明にかけての時期に、計画的な都市計画によって形成されたと考えられる。

近代になって描かれた「寧夏省城全図」によると、東南の門外と東北の門（徳勝門）外にはっきりと城廂が描かれている。ここでいう城廂とは、本体の城郭とは別個に、城門の外に設けられる附郭で、外部から到来する旅行者のための施設や、城郭内には置かれぬ商業施設などがたちならび、繁華街を形成することが多い。

現在の市街地でこの場所を探してみると、南門の位置から南にこの城廂の外郭を示すような街路の構造があるのがよくわかる。現在、この地区は南関と呼ばれ、銀川で最大のイスラムのモスクもここにあるが、銀川市街地のなかでもっとも回族が集中して居住するところであり、また現在でも郊外への遠距離バスの発着場があったり、小規模な旅荘が多数分布していたり、外部との交通の拠点にもなっている。南関よりさらに南は、もとの郊外の農村と錯綜する典型的な城中村の様相を呈している。

絵図にある南門と現在を比較して見ると、南門の外に月城のように張り出している部分が現在の南門広場に当たる部分であろう。またその南に伸びる勝利路が、絵図で城廂の中央を縦断している街路である。実際に現地をみると、絵図にあるような微妙な屈曲も残っている。

したがって城廂は、東が現在の清和南路、南が南橋東西巷、西が玉皇南街及びその延長路、そして北が南門広場の南、新運巷で区切られる範囲ということになる。南門は明清時代には正式に南薰門と呼ばれたが、現在、この南の街路は南薰路と呼ばれており、地名の点からも歴史時代の名残があることがわかる。一方、北門の外部の城廂については、現在の地図では南門ほど明確ではないが、現地をみると、やはり小巷によって区切られた一角があり、その痕跡が確認できる。また南関と同じくここも北関と呼ばれており、北関モスクも存在する。

元から明にかけての変遷のなかで、城郭の西半が撤去され、東半が実質的な都城として機能してきたということがあったが、絵図を見ても市街地は城内の東に偏在しており、西や北西部は荒蕪地が多く、北部には湖泊が存在しているのがわかる。ただ北西の一角は西

夏のときの離宮が置かれたといい、現在も湖泊や小さな丘陵を含んだ公園（中山公園）となっている。この公園の西門付近には、かつての城壁の一部が保存されており、前近代の城郭をしのぶ唯一の遺跡となっている。

以上、銀川の城郭のごく一部ではあるが、前近代の都市構造を検討した結果、現在の市街地の街路の構造には、かなりの過去の痕跡がかなりよく残っていることがわかった。

古図に見るように、本都市には多くの寺監や廟堂が存在していた。単純には計れないが、その面積が都市のなかで占める割合はきわめて大きい。これが中国の前近代都市一般にいえることなのか、辺境の都市としての特殊性によるものなのか、あるいは乾燥地域のオアシス都市としての特殊性なのか、一般論としていうことは難しいが、本書でも別稿で述べた甘肅省酒泉の調査の時にも同様の印象をもった。

比較都市構造論の見方からすると、北京のような帝都の場合も、中央の紫禁城やその附属施設は別にしても、内城内に散在する官寺や皇帝の親族の第宅(王府)などが、大きなスペースをとっている。またそのような帝都レベルの大都市でなくても、県城レベルの中小都市において県署やその他さまざまな官僚組織を維持するための施設(衙門)が広いスペースをとる。また城隍廟や関帝廟をはじめ、寺廟の敷地も大きい。そしてそれらの空間が、現在でも多くはそのまま残されている。宗教的施設は別の機能を持ち、王府などもそのままではないのだが、政府の施設や学校など、公的な利用が行われている場合が多い。

これは、中国の歴史的都市における空間構造の特性として検討する必要があるのだが、ここ銀川においては、多くの官署寺廟は、現時点ではほとんど痕跡がない。唯一、市内に一箇所のみ仏教寺院が残るが、これも住宅団地の中に埋もれるように残っているだけである。近代以降、なぜ銀川においてこれほど完璧に過去の空間構造の痕跡がなくなったのか、辺境都市の特殊性として理解できるのかどうかの一つの問題である。

《酒泉》酒泉は、漢の河西四郡の一つとして設置されてから、行政領域の名称は変化したものの、一貫して現在の市街地と同じ地に都市的集落があったと考えられる。漢から南北朝期には酒泉郡が置かれ、周辺のいくつかの県を管轄した。酒泉郡自身は、涼州(武威)に隸属していた。隋初に酒泉郡を廃して鎮を置き、甘州(張掖)に隸属したこともあったが、やがて甘州から肅州を分け、もとの酒泉鎮に置いた。以後、県の上位の行政領域として郡が廃され州になると、酒泉は肅州という名で呼ばれることが一般的になる。元代には州にかわって路という呼称が使われ、肅州路とされた。明代には前述のように肅州衛が置かれ、

軍事基地としての色彩を強めた。

現在の市街地は、明清時代の城郭の上に形成されたものであるというが、歴史的な都市の面影を残すものはあまりない。酒泉城の建設は漢代に遡るが、漢代の城郭は地震によって破壊され、原型をとどめていないという（『十三州志』）。その後、前涼の永樂元年（346）、酒泉太守となった謝艾によって漢の故地の上に建設されたもので、現在の鼓楼から西の部分がそれにあたるという。当時の城郭の規模は周囲が3里余で、現在の鼓楼がその当時の東門にあたり、もう一つ南門があった。現在の酒泉市街地の小西街が南の団結西路に突き当たるところに、一基の城門が残されているが、これがこの前涼の時代の南門であり、明洪武28年（1395）、肅州衛の指揮使裴成が肅州の防御機能を高めるために城郭の大改造を行った際、城壁の中に埋め込まれてしまったという。

それまでは肅州の城郭は、現在の鼓楼の南北を走る北大街、南大街よりも西に広がっていただけであった。この時に、東の方へ城郭を拡大する一方、全体の城壁を整備し、より堅固なものに改造した。その際に、もとの南門は閉鎖されて南面の城壁の中に埋め込まれ、さらに万暦2年（1574）には、磚を用いて城壁を固め、人々はそこに城門があったことを忘れてしまっていた。ところが近代になって城壁を撤収したとき、その中からこの城門が現れたものであるという。

洪武年間の改修は、それまでの城郭の規模を倍加するもので、東の城壁は撤収してその中央の一部を改造して鼓楼にしたという。そしてもとの城壁の線を南北の基軸として、その東にほぼ同一規模の城郭を拡張した。上掲の明代の平面図を見ると、鼓楼をはさんで北大街、南大街の南北線を境に、東西対称に市街地が展開している。とくに西は、晋南門が置かれていた小西街とその北に続く街路が、南北の中軸線のように走り、この西半分だけ一個の城郭であったことがうかがえる。

洪武の改修のころ、西方でモンゴル帝国の後に勢力を伸ばしていたチムールの第四子シャー・ルフは、1419年（永樂17）、明との和睦のために乗馬を贈る使節を派遣している。その旅行記に改修直後の肅州が記載されている。

この記述によると、城門が4あったという点は実際と一致しないが、最初に城門付近の駅館に宿を取ったとあり、明の平面図にある南門の門内にある駅運站に一致する。城内の直線状の街路の様子もよく理解できる。

その後成化3年（1466）、東の城門外に長方形の土城を築き、それにも東、北、南に小さな門を開いた。この形がその後清末に至るまでの肅州城の姿で、今日はその城壁が一部を除いてすべて撤去され、城郭都市の面影は

ほとんど見られないが、現在の市街地の街路は基本的に明清の城郭の街路をそのまま踏襲している。

明代の平面図によってその構造をみると、鐘楼をはさんで南北大街より西では、西大街の南、中央に近く肅州衛指揮司があり、北には分巡道署、知州府、察院、布政分使などの軍事行政の施設がある。西の城壁に沿って西大街の南に大きな面積をとって肅州城隍廟、五涼城隍廟、高台城隍廟と、大規模な城隍廟があり、戲台があるなどからみて、ここが祭日などには大いに賑わう場であったことが推察される。西大街の北には玉皇廟、葉王廟、鐘樓寺などがある。西北の一角は空地となっているが、西北部は土地も低平になり、北大河に近く、不安定な土地であった可能性がある。

これに対して南北大街の東の市街地は、西に比べて小巷街路が多く、建物の建築密度が高いように見える。こちらにも都察院や大察院、兵備道、儒学などの官庁もあるが、めだつのは、シャー・ルフの使節が述べているとおり、孔廟（文廟も別にある）、武廟（関帝廟も別にある）、娘娘廟、王爺廟、火神廟、雷祖廟などの多くの廟宇である。また陝西会館、直東会館などの会館もあり、交易などで肅州をおとずれる人々の来源を暗示している。清代の地図では、会館として江浙会館、山西会館、五省会館などが見られるようになっている。この地区の北部、文廟や関帝廟の後背にあたる場所は、酒泉の城郭の中では例外的に街路が入り組み、袋小路状の小街巷がみえるが、このあたりは小規模な民家が立ち並んでいたところであり、現在、ここは旧城改造の対象として急速にこのような民家がなくなりつつあるところである。

東門から外の東関土城と呼ばれた一角は、東西を貫く東関大街の南北に市街地が設けられているが、大街の南部は比較的整然として南部にはいくつかの仏教寺院が立地しているのに対し、北部の北後街は袋小路状に入り組み、そこは明代の地図は「回民区」と記している。河西回廊の都市には、いずれもかなりの数のイスラム教徒が居住していたと考えられるが、酒泉ではこのように、城関地区に居住区を設けたのであろうか。あるいは、東関土城の拡張も、回民居住区の設置が一つの目的であったのかもしれない。清代にはその東に肅州清真寺が建てられるが、これももともとは城内の東北隅にあったものを移築したもので、城内に一定の回民が居住していたことを示している。

旧城の範囲を、南北大街と東西大街の十字路で4分し、それぞれについてみると、西北部は、過去その西半分が空地であったが、そこは現在、市政府の職員住宅になっている。西大街に面したところは、かつて鐘樓寺（大

法幢寺)という寺院や、いくつかの廟があったが、現在は酒泉中学がその地を占め、校内には往時の廟宇の建物が残っている。その東側、北大街までの間は、南の西大街に面するところは現在の肅州区政府・党委員会の所在地であるが、このあたりは過去においても察院や布政司などの役所があったところであった。

西南部については、小西街と城壁の間は、南よりに軍の施設があり、西大街に面するところは、小学校や市民病院になっている。過去においては広大な城隍廟があった。小西街より東は、西大街に近いところは政府官庁や映画館などの大型の施設が並んでいるが、かつては肅州衛指揮司などの役所があったところである。

東北部については、東大街と現在の共和街(清代には文廟街)との間は、銀行やオフィスビルが並ぶビジネス街になっているが、明清代には都察院などの役所や一部には道観、会館などもあり、まとまった施設を建設する土地がえられる場所であったといえよう。共和街の北の一角は、前述のとおり袋小路状の小街巷が交錯する一角であるが、酒泉城内で、もっとも小規模な民家が密集していたところであった。現在は、危険家屋として撤去再開発の対象となっている。東北部の東の城壁に近いところは学校やスポーツ施設になっているが、これは明清代にあつては教場(軍隊の教練場)であつて、もともと広いスペースが確保できる場所であった。

東南部は東大街に沿った表通りとその南の肅園街の間は、金融機関や政府機関が並んでおり、東大街をはさんだ東北部とよく似ている。しかしその南になると、明珠花園をはじめとし、いくつかの大型の集合住宅群がみられる。この明珠花園は、明清代には孔廟、武廟、肅州儒学などがあつた一角で、やはり広大な土地が確保できる条件があつたと思われる。現在の尚武街が団結東路に交わるあたりにも、欧州苑と称する欧米の住宅に模した集合住宅があるがここはかつて草場や陝西会館があつた場所で、土地に関して同じことがいえる。

このように、中国の都市において、現在の土地利用と過去の都市内構造とは密接な関係があるといえる。とくに広大な面積を必要とする住宅地も含め、都市施設の建設に当たっては、そこが過去どのような場所であつたのかが大きく関係する。この酒泉でも、広大な面積をもつ施設が建てられている場所は、おおむね過去、行政官庁であるか宗教施設であつたケースが多かつた。

歴史的に見て、中国において都市はまず一義的に行政の中心である。複雑な中央集権的な官僚制に基づく行政組織は、地方に大量の官吏を必要とし、またそれぞれが独立した官

衙を必要とする。官衙は、そこに勤務する官吏の私宅も兼ねるので、勢い規模も大きくなる。都市はある意味でそれらの官衙の集積であり、その官衙にサービスする機能が、その周辺に群がり都市の構造をつくる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①秋山元秀(2011)「西安市街地の「城中村」『西北中国はいま』石原潤編、ナカニシヤ出版、pp. 26-36、査読無
- ②秋山元秀(2011)「辺境都市銀川の歴史的構造」『西北中国はいま』石原潤編、ナカニシヤ出版、pp. 112-123、査読無
- ③秋山元秀(2011)「オアシス都市酒泉の変貌」『西北中国はいま』石原潤編、ナカニシヤ出版、pp. 165-175、査読無
- ④秋山元秀(2010)「成都の都市構造の成立と展開」『変わりゆく四川』石原潤編、ナカニシヤ出版、pp. 10-26、査読無
- ⑤秋山元秀(2008)「中国の伝統的地理思想と中国の空間構造」『アジアの時代の地理学伝統と変革』千田稔編、古今書院、pp. 57-66、査読無
- ⑥秋山元秀(2008)「アジア都市の光と影」『都市と農地景観』(アジアの歴史地理2) 秋山元秀ほか共編、朝倉書店、pp. 200-214、査読無

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

- ①秋山元秀ほか共編(2008)『都市と農地景観』(アジアの歴史地理2)、朝倉書店 366pp.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

秋山 元秀 (AKIYAMA MOTOHIDE)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：00027559

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし